通信販売

四谷イツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
通信販売

【Ｎコード】
Ｎ２８２０Ｉ

【作者名】
四谷イツキ

【あらすじ】
強くなりたい。
そんな僕は夜中の通信販売でそんな願いを叶えるとっておきの商品を購入した。
しかし、それはあまりにも現実離れしていて・・・。

1～申込～（前書き）

６年前に執筆した、なんとも不思議なお話です。
もやしっ子の彼がどうなるのか・・・
通信販売の内容とは・・・
拙文乱文はご愛嬌でお願いします。

1～申込～

もやしっこ。

そんな名前で呼ばないで下さい。

僕は、そんな名前じゃないんです。

そもそも、『もやしっこ』って何ですか？

もやしに失礼ですよ・・・。

でも、『もやしっこ』なら、まだいいんです。

『ホネ』とか、『チキン』とか、止めてくれませんか。

もう僕が人間だってことも忘れてるでしょう？

僕だって強くなりたいと思いますよ。

強く、たくましい人間になりたい・・・。

僕がそれに出逢ったきっかけは、何だったんでしょうか。

そう、確か深夜の通信販売の番組でした・・・。

2～発送1～

軽快な音楽がテレビのスピーカーから流れ、その音にあわせて会社名が歌われている。
僕は毎晩、その番組を見るのが習慣化していた。
特別な意味はないが、その作られたと言わんばかりの演出と下らない商品の陳列を見ると心が和んだ。
買う人なんかいるのだろうか。いつもそれを思う。
考え始めると切なくなるので、あまり考えないようにしていた。
その日も、僕はいつもと同じようにその番組を見ていた。

後ろから母親が早く寝なさいと小言を言うが、それも毎晩のことだ。
いい加減、諦めて欲しい。
そしてその後には必ず同じ文句を加える。
「だからアンタは、なまっちろいのよ」

大きなお世話だ。

リビングの電気は消され、僕とテレビだけしか生きていないように思えた。
口だけ達者な日本人の通訳をつけられた妙な外人が現れ、商品を紹介する。
使用者のコメントなんかは聞けたもんじゃなかった。
あまりにもチープなつくりに、商品まで安価じゃ買う気も起こらない。
その馬鹿さ加減が、僕を和ませてくれる。

その日は、この下らない番組を見た後に英語のテスト勉強をするつもりだった。
そのため、僕の横には濃い珈琲が用意してある・・・はずだった。
番組は中盤を向え、コマーシャルを挟んでいる。
このコマーシャルが困ったことに、異常なほど長い。
深夜だからそう感じるのかもしれないが、僕には耐えられない長さだった。
毎晩、ここで僕は終盤に備え飲み物を用意する。
しかし、今晩はその必要はないはずだった。
母親のおこぼれの珈琲が、僕の横にあるからだ。

白いカップを覗き込めば、暗黒のような色をした大人の飲み物が僕を待っているはずだ。
しかし、そこに暗闇は無かった。
大人の味もしなかった。
ただ底に張り付いて乾いた液体が僕をさげすんでいるだけだ。

・・・僕は酷い虚無感に襲われた。
母親は、用意しておいた僕の分まで飲んでしまったのだ。
眠る母親の元まで行って、その腹を切り裂いて珈琲を回収してやろうかとも、一瞬だけ考えた。
白いカップを睨みながら妄想を膨らませているうちに、長いコマーシャルが明けた。
またあの軽快な音楽が頭に響く。
終盤戦を乗り切る友もいないまま、僕はテレビに向き合った。
いつにも増して苦痛な時間になることは間違いないだろう。
苦痛になるのだったら見るのを止めればいいのだが、そうにもいかない。
変な話だが、僕の中にプライドというものが芽生え始めていたのだと思う。

後半期最初の商品は、僕の嫌いなものだった。
化粧品、プロポリス配合の、ファンデーション。
全くといっていいほど、いや、実際全く、僕には無関係だ。
横目で手の甲に塗られたファンデーションの宣伝を見る。
「あらぁ、こんなに白いわぁ！」
全く、その通りである。
それを塗られた右手と左手を比べれば、白さは一目瞭然。
しかし、その人工的な白さに死体を連想するのは容易かった。

そうだ、明日は英語のテストがある。
頭の冴えない僕は、このテストで良い結果を残さなければいけない。
ましてや青点など取ったりすれば、間違いなく単位を落とす。
最近は、「学校」に通うだけで自分の首を絞めているような気がしてならない。
だがそれも、あと一年の辛抱だ。
留年しなければの話だが・・・。

ファンデーションに感嘆の声を上げる女性。
いまや既に僕の興味はすっかり削がれていた。
英語の単語が頭の中を踊り、僕を馬鹿にする。
その乱舞が激しくなればなるほど、僕は心配になった。
つまらない女性用商品の宣伝など、どうでもいいじゃないか。
通信販売の閲覧はもう切り上げて、今夜は英語と仲良く遊ぼうと立ち上がった瞬間、
僕が諦めるのを待っていたとばかりに、ファンデーションの紹介が終わった。
テレビから流れる言葉に、僕の耳は敏感に反応する。

『これであなたの人生が変わります』

テンポ良く移り変わる画面に吸い込まれるようにして、僕はテレビの前に立った。
チープな作りなのに、なぜか僕の興味を引く。
『お次の商品はこちらです。未知のドリンク、マジカルマッスル！
マスカット味で飲みやすく、これを飲めば一週間で効果が現れます』

もっといい名前がつけられなかったのか、可哀相に。
使用前・使用後の写真が画面を飛び交う。
僕のように弱々しい体が映し出されては、正しく別人をなった一週間後の同一人物が現れる。
その変わりように、普段の僕だったら間違いなく疑うだろう。
そして罵倒するにに違いない。
しかし、深夜のテンションで挑めばそれも変わってしまう。
僕はすぐにその商品に興味を持った。
「興味を持った」というのは嘘かもしれない。
既に購入する気でいた。
マスカットフリークの僕としては実に興味深い商品なのである、などと頭の中で自分を慰めた。
葡萄など、別にどうでも良かったのが本音だった。
『この粉末を水に溶かし、運動前に飲むだけなんです』
なんと簡単！
これなら三日坊主で終わってしまう僕にも可能なのではないだろうか。
運動するかしないかは、別としても。
『一日一回として計算すると、この一箱で一ヶ月持ちます。

そこで、今回はなんと！二箱でこのお値段！』
僕の目は釘付けだった。これまでに、こんなに興奮した商品があっただろうか。
かの腹筋マシーンを初めて見たときもここまで興奮しなかった。
今となってはその機会も僕の三日坊主に負けて誇りを被っている。
『五千円を切ってのご奉仕！』
安い！と、思わず声をあげる。
安価のために疑う、などという感情は遠くの島国にでも流されていた。
当たり前のように、「五千円を切る」と言ってもたったの二十円だけだ。
しかし、それでも僕は構わない。
素敵な興奮をありがとう！と言わんばかりに、電話を手に取った。

そこで体力を使い果たし、僕は番組の最後まで見ずにテレビを消し眠った。
すっかり満足して、珈琲が飲めなかったこと悔しさすら忘れていた。

加えて、英語のテストのことも忘れていた。

3～発送2～

あれから二日後、僕は英語の追試を終えて家に帰った。
追試の結果も悪いに違いない。
どうしてあの日、あんな商品にうつつを抜かしてしまったのだろう。
おかげで青点どころの騒ぎではなかった。
羅列した英文字にも笑われ、呼び出された英語科の教員にも笑われ、
おまけに自分でも笑ってやった。

「おかえり。あんた宛に小包が届いてたわよ」
台所で食器を洗う母が言った。
英語のテストの結果のことなど、言えるはずがない。
部屋に入ると、小ぶりの小包が僕を待っていた。
今日やった追試のプリントと同じくらいの大きさだった。
ちょっと引きずりすぎかもしれない。

小包を持ち上げてみる。
こんなものでこの貧弱な体が強くなるはずがない。
嗚呼、本当にどうして僕はこんなものを買ってしまったのだろう。
葡萄の味なんか堪能しなくたっていいじゃないか。
後悔が並のように押してきて、海には帰らずにそのまま僕を押し潰した。
おもむろに包装を破る。
すると、白い無地の箱が現れた。
少しくらい外見にこだわってくれてもいいものを、こんな安っぽい箱に入れやがって。
この中に、二ヶ月分の『マジカルマッスル』というふざけた名前の粉が入っている。
本当にふざけている。

自嘲を含みながら、その蓋を上げた。

奇怪な物がいた。

思わず蓋を閉じる。
そして、またゆっくりと蓋を開ける。
このような状況に陥った時、人間は誰でも同じ行動しか取れないのだろうか。
人間はあくまでも「意識を持った動物」なのだと思い知らされる。
僕のこの高度な思考などとは裏腹に、そこには見たことのない物体がいた。
箱の中に横を向いてきっちりと収まり、四肢を持ち、まるでキャラクターものの猫のようだ。
その表面は光沢を放って銀色に輝いている。
まるで鉄化銀のようだが、それでもないらしい。
四肢とは別につるりとした何の突起もない頭が大きな亀裂を携えてついていた。
もはや、それが頭と呼んでいいものなのかも分からない。
深く呼吸をして、とりあえず机の上に箱を置いた。
置いて初めて、見かけの割りに重さがないことに気付く。
箱から距離をおいて僕はじっとそれを見つめた。
何が起こるか分からない。

「・・・生き物？」
首を振った。どうじゃない。
あの粉末がどうしてこんな奇怪なものに化けたのかが問題なのだ。
この物体が粉末だとは言わせない。
どんなに巨人であっとしても、これを粉末と呼ぶには無理がある。

銀色に輝くソレを見ていると、なぜか無性に恐怖感に襲われた。
僕は箱を机の上に放置したまま、母親の元へ向った。
既に食卓に夕食が並べられており、妹がテレビを見ながら漬物をつまみ食いしていた。
「お兄ちゃん、どうしたの？いつも白い顔が今日は一段と白くなっているわよ」
「あら、本当。血が足りてないんじゃないの？」
母が食卓に皿を並べながら言った。
僕は何をどう説明していいのか分からず、立ち尽くしてしまう。
ふと、後ろが気になった。
どこかで見たことのあるものが視界に入ったような気がしたのだ。

「うわぁ！
「何？」
妹が椅子から飛び上がり、僕の視線のほうを見た。

いてはならないものが、そこにはいた。
いて欲しくないものが、そこにいた。

さっきまで机の上の箱の中に、静かに収まっていた例のアレがそこにいたのだ。
つるりとした頭に僕が不気味に映る。
それは縦に伸びて、宇宙人のように見えた。
先の丸い四肢でしっかりと立ち、その頭は僕を見上げていた。
しかし、口のような亀裂しかないため見えているのかは分からない。
「・・・何よ、ゴキブリでも出たのかと思ったじゃない」
妹がタメ息をつきながら椅子に戻った。
「コレ、何だと思う？」
僕が妹に話しかける。
妹はまた漬物に手を伸ばしてテレビを眺めていた。

僕に視線も向けないで、興味のない返事を返す。
「コレって？」
「僕の前にいる、この銀色のヤツ」
はぁ？と癇に障る声を出すと、彼女はまた僕を覗き込んだ。
ソフトボール部で活躍している彼女の腕に、筋肉が盛り上がる。
兄妹なのに、どうしてこうも違うのかと何度も悔やんだことがあった。
「・・・何言ってるの？お兄ちゃん、熱でもあるんじゃない？」
そういうと、すぐにまたテレビに視線を戻した。
僕の前には、まだ銀色のヤツが佇んでいる。
彼女には見えないのだろうか。
額に手を当てる。しかし、熱などあるはずもなく逆に冷たいくらいだった。
ちょうどサラダを運んできた母親にも同じ質問を投げかける。
「本当に大丈夫？顔、真っ青よ」

見えていない。誰にも見えていない。

もしかしたら、女には見えないで男にしか見えないのかもしれない。
父親が帰ってくるのを待とう、そう思ったと同時に玄関から父親の声がした。
僕は、その元へ駆けて行く。
ネクタイを緩めながら靴を脱ぐ父親の姿があった。
僕が駆け寄ると、彼は豆鉄砲をくらった鳩のように目を丸くしたが、気にしなかった。
そして早くリビングに向うように促す。
「分かった、分かったから落ち着きなさい」
父はよく分からない顔をしながら、靴を脱いで上がる。

それを見計らって僕は後ろを振り返った。
少しだけ、呼吸が乱れる。
また、ヤツはそこにいたのだ。
「アレ！アレ、見えるでしょ？」
股僕を見上げるようにして佇む銀色を指差した。
父親は顔を歪めながら母親の名前を呼んだ。

「おーい！こいつ危ないぞー」

僕は落胆した。
そうせざるを得なかった。
そして、まるで何事も無かったかのように振舞うことを心に誓った。
これ以上、僕が変な人間だと思われても困る。
挙句の果てには病院に連れて行かれるかもしれない。
しかし、実際に銀色は僕の前にいた。
その大きな亀裂を歪ませて、僕をどこまでもつけてきた。

4～発送3～

次の日の朝、僕は重い気分で目を覚ました。
販売元の会社に電話しようにも、あの箱には何も記されていない。
例の通販番組を見ようと思ったのだが、なぜか放送されていなかった。
土日を除いて毎日やっていたあの番組が、やっていなかったのだ。
もう僕にはどうしようもなかった。

昨夜、ベッドに入って眠ろうと横を向いた。
銀色は僕と同じようにベッドに入り、大きな亀裂を閉じていた。
思わず叫びそうになりながら、半ば気を失うようにして眠りについた。
お蔭様で、これっぽちも快眠などできなかった。

「なんかさぁ・・・腕に力が入らないんだよね」
妹が食パンにマーマレードを塗りつけながら呟いた。
僕はどうしてもマーマレードを好きになれず、いつもバターだけを塗って食べている。
その時も、銀色は僕の足元にいた。
その座り方はまるで犬のようで、頭部を見なければ可愛いものに見えるだろう。
大きな亀裂の端が微かに上がる。
笑ったようにも見えるが、僕にはそれが空腹の合図のように思えた。
他の人間に気付かれぬよう、僕はパンの切れ端をちぎって銀色に差し出す。
すると、銀色は頭を振ってパンを押し返した。
どうやら僕の推測は外れていたらしい。

静かにパンを皿に戻す。銀色は、微笑んでいるように見えた。
「行ってきます」
僕は妹の愚痴を尻目に立ち上がった。
きっと、部活での筋肉痛が祟ったのだろう。
僕が鞄を肩にかけている傍らで、銀色は妹を見つめていた。

今日は一時間目から体育がある。
僕の最も得意としない教科だ。
むしろ、得意な教科など存在しないのだが、その中でも最上級だった。
しかも種目は野球である。
妹の得意な分野をやる羽目になるとは思ってもいなかった。
複雑な気分になる。

僕のクラスには、野球部のエースがいる。
彼の頭は丸坊主で、誰が々見ても野球部員にしか見えない。
だｒが否定しようとも、僕だけはそれを絶対に許さないだろう。
それほど、高校球児にしか見えない奴なのだ。
彼が二つに分けたチームのどちらに入るかで勝敗が決まる。
それとは逆に、僕が入った方が負ける。
釣り合いの取れた法則が悲しくも成立してしまっているのだ。

しかし、今日は違った。
どうしてか、その釣り合いの取れた法則はまるで逆になった。
数学のいらない方程式よりも現実的で正確だったはずのこの法則が、
まるで意味の無いもののように無下になった。
僕のいるチームが勝ってしまったのだ。

エースの坊主君は、ここぞという場面でその運動能力を発揮できず点数を稼げなかった。
僕といえば、いつもなら三振するはずの所を勢い良く、打った。
この僕が、打ったのだ。
生まれて初めて僕のバットがボールにぶつかった。
世界は今日で終わるのかもしれない、とクラス中の連中が思ったことだろう。
僕もそう思ったのだから仕方ない。

いつもは特定の人物としか話さない僕だが、今日だけはやたらと話しかけてくる奴が多かった。
そのたびに、僕は若干の緊張を覚える。
遠くで席に座るエースの坊主君が気になった。
それも当然だ。

彼の傍に銀色がいたのだ。

急に周りの言葉が耳に入らなくなり、僕の前にいる誰かの腹の脇から見えるその映像に釘付けになっていた。
ノートをパラパラとめくる坊主君に、銀色がよじ登る。
その行動は決して容易なものには見えなかった。
もしこの映像を絵に出来るのならば、僕は銀色の頭の横にたくさんの汗を描くだろう。
そして、銀色は彼の肩に乗った。
ずり落ちそうになりながら、四肢を器用に動かして体が安定するように居場所を作る。

銀色は生きているのだろうか？
それとも誰かに動かされているのだろうか。

・・・誰に？
リモコン動かすにしても、監視していなければいけない、
それに銀色の雰囲気は、機械が放つようなものではなかった。
何より、銀色は僕にしか見えていないのだ。
坊主君が気付いていないのが、それを明白なものにしている。

銀色は、その滑らかな頭を勢い良く振ると、大きな亀裂を開いた。
初めて見る銀色の野生的な表情に少し恐怖したが、黙ってそれを見ていた。
何せ誰にも見えないのだ。
アレが誰かに何か危害を与えるとは思えない。
銀色は大きな口で彼の肩を噛んだ。
しかし、坊主君に反応は見られない。
やはり、目に見えないのだから感じることもないのだろう。
僕は安心して、再び会話を楽しんだ。

軟弱な体の上、積極性にも欠ける僕は旗から見ても面白い人間には見えないだろう。
それが、今日という日に少しだけ変わった気がした。
儀に露は、時たま僕の所へ戻ってきては僕を見上げた。
僕の前では亀裂が大きく裂けることはなく、徐々に愛着が沸いていったのも確かだった。
亀裂の笑顔を見せると、またすぐにどこかへ出かけては戻ってくる。
時々、坊主君の時のように誰かに噛み付いていることがあったが、
誰もそれに気付いている様子は無かった。

ペットを飼う時は銀色を飼うことにしよう、心の奥でそう決めた。

5～発送４～

幸せな日を終え、僕はまた新しい一日の初めに立っていた。
ベッドから起き上がり、銀色を見つける。
たった二日しか経っていないのに、僕の中で何かが変わっている。
一週間で効果が見られる、なんていうキャッチコピーもまんざら嘘ではないのかもしれない。
根本的名部分での相違点は大いにあるが。

いつもの通り、制服を着る。
僕の高校は、伝統的名詰襟などではなくブレザーである。
真っ白いシャツも、今では僕の肌とは同化しなくなっていた。

・・・色が違った。

今まではシャツに腕を通しても、着ているのか着ていないのか分からないくらい僕の肌は白かった。
そして、細かった。
今は違う。全てが違う。
そういえば、体も重いような、それでも軽いような気がする。
急いで鏡を見る。僕の部屋にはないため、洗面台まで駆けて行った。
足も軽かった。

思わず息を呑む。
これは、どうしたことだろうか。
人間はこんなにも簡単に、そして短時間の内に変われるものなのか。
肌は日に焼けて色素が濃く、腕も足も腹筋も逞しいものになっていた。
明らかに今までの僕ではなかった。

足元で銀色が笑う。その亀裂を規則的に歪ませて、僕に微笑みかける。
妹が今にも透き通りそうな肌をまとって僕の前に現れた。
以前の僕のように、白い肌をしている。
「お兄ちゃん、おはよう・・・いつの間にそんなに強靭になったの？」
「・・・寝ている間？」
僕にはよく分からなかった。
きっと、通販の効果に違いない。
通販でやって来たのはただの銀色の奇妙な生き物である。
それが二日で僕をここまで変えたのだろうか。
ありえない、そう思いながらもそれしか答えが見当たらなかった。

学校に着けば、心なしか活気が無かった。
朝練をしているはずの野球部は誰一人として校庭に出ておらず、細くなった体を引きずるようにして校舎に吸い込まれていく。
いつもと勝手が違う体で来たせいか、僕の方が騒がしいくらいだった。
「もやしっこ」と呼ばれていた二日前の僕には考えられないほど、高揚していた。
運動部でこんがりと焼け上がった肌をしていたはずのクラスメイトも、ホネと呼ぶのに相応しい体をしている。
いつも一緒にいる友達だけは変わらず、以前からのその軟弱な体を保っていた。
「これは、どうなってるんだ？」
僕が言う。
友達は首をかしげて、お前が一番おかしいと言った。
確かに、彼の言うとおりである。

その友達と僕の間に、銀色が座った。
何かを待っているようで、そして何も期待していないような雰囲気が窺える。
僕は意を決して銀色を掴みあげた。

ソレは、壊れた。

僕は、銀色の腕と足の間を、つまり胴体の部分を掴み、持ち上げた。
前にいた友人は不可思議な顔をしていたが、確かに僕は銀色に触れた。
体温のない、つるつるとした感触だった。
しかし、その接触が最後だった。
持ち上げた瞬間、銀色は亀裂を大きく開け、そこから僕にだけ聞こえる悲鳴をあげて崩れてしまったのだ。
胴体の部分が粉々に砕け、床に散らばる。
もちろん、その破片さえも誰にも見えていないのだろう。
僕は力なく床に座り込んだ。
銀色の残骸を目の当たりにして、ソレが行ってきた行動をようやく知る。

銀色の砕けた腹部には、赤い繊維が詰まっている。
――それが、誰かの筋肉だ。
大きく裂けた口の中には、薄黒い色素が詰まっている。
――それが、誰かの焼けた健康的な肌の色なのだ。
そして、僕にそれを植えつけていたに違いない。

僕は銀色の頭部を手に取った。
銀色から与えられた強靭な筋力で壊してしまわないように、優しく、抱えた。

6～開封～

もやしっこ。

最終的にはそれでいいのかもしれないです。

僕のこの、弱気な部分だけは変わらないですから。

でも、誰も僕のことを「もやしっこ」とは呼ばなくなりました。

僕は夢でも見ていたのかもしれません。

あっという間に僕の体は前の状態に戻り、

周りの人間もすぐに健康的な体を取り戻しました。

白くても、弱々しくても、僕にはこれが似合っているんです。

強くなりたいと思うときには、奇怪な物体を見ます。

銀色に光り、
僕を宇宙人のように映す、
大きな亀裂の入った頭部を。

6～開封～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。
この変ちくりんなお話は、
ネタにつまった！しかし高校の文化祭に提出する作品を書かねば！
という時にスーパーに買い物に行ってもやしを発見して思いつきました。
基本的に短いお話ばかりですが、よろしければ他もごらんになってみてください。

貴方に、数々の未体験の人生が、活字で得られますように。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2820i/

通信販売

2010年10月28日06時28分発行